

ハイミトー・フォン・ドーデラー 小説『シュトルードルホーフ階段』 —Menschwerdung (人間化)における「発展」とは—

村山雅人

キーワード：ドーデラー「人間化」

I

本来ウィーン小説であるハイミトー・フォン・ドーデラー (Heimito von Doderer, 1896-1966) の長編『シュトルードルホーフ階段』(1951) は、小説の舞台がこのオーストリアの古都だけにとどまらず、コンスタンチノーブルからベオグラードそしてブダペスト、または南米のブエノスアイレスに至る、宏大な空間を要求している。作者が主張しているように、あらゆるものとの相互関連の中に生存している人間の人生すべてを語るには、これほど大がかりな舞台が必要であったのかもしれない。(1) しかし、この大規模な小説空間の広がりとは、それだけでなくその構成が迷路のように入り組んでいる物語を一層煩雑にしている。

この小説の主要なテーマは Menschwerdung (人間化) (2)であり、そこには一人の人物がいろいろな範疇の人物たちの運命と交差しながら、全き人間に生れ変わる過程が描かれている。この問題はドーデラーの小説に共通して認められる中心テーマで、それを H・アイゼンライヒは簡潔に、「回り道をしながらの人間化」(3)と表現している。しかし、この小説の中心に位置しているのは、「人間化」を遂げてゆく旧オーストリア帝国歩兵隊少佐メルツァーではなく、小説の表題に使われている「シュトルードルホーフ階段」である。作者の言葉によると、ここに登場する人物の多くは、彼らの人生のとある局面で深くこの階段と結びついていて、それは激動の時代の中でも変わらず超然と存在しつづけ、人間存在の連続性を指し示して

いるものである。さらに、この「階段」のもつ特殊な建築構造は、人間があゆむ迂回の行程と、その過程で演じられる人生の舞台を視覚的に象徴するものとして小説の中でその場を得ている。(4)

この小説において、ドーデラーは新しい試みを行っている。つまり『万人の犯す殺人』(1938)、『窓の灯』(1951、但し成立は1939)までの彼の小説では、一人の主人公を中心に物語が展開される。しかし『シュトルードルホーフ階段』で、作者はこの物語方法を放棄する。なるほど、小説のテーマはメルツァーの運命を中心にして表現されるが、小説の中で彼ほどのウエートを獲得していないにしても、多くの人物が登場し、彼らに関わるエピソード、あるいは事件が、メルツァーの物語と平行して語られていく。ただし、いわゆるオムニバス形式とは異なる。これら登場人物たちにもつわるそれぞれの物語は、一気に完結した形で叙述されるのではなく、小説展開の軸となる、過去と現在が複雑に交差するメルツァーの恣意的な思い出との関連で、その都度、部分的に叙述されるにすぎない。したがって、彼らの物語は、これらの断片的描写をつなぎあわせて初めて、それぞれ一つの比較的まとまった、独立したものとなる。この叙述方法に、個人ではなく、時代あるいは社会の全体を写し出そうと試みた作者の意図を読み取ることができる。

このように独立した多数の物語が一つの小説の中で同時平行的に物語られ、それにより社会の全体像を写し出そうとするこの表現方法は、19世紀のリアリズム小説の一つの手法である、K・グツコーが提唱した「並列関係の小説」(Roman des Nebeneinander) の伝統と結びつく。ドーデラーにおいて、この物語方法がより高い完成度を持って表現されたのは、彼が1956年に発表した龐大な長

編小説『悪霊』においてであった。したがって、個人と社会の両方に重点が置かれている小説『シュトルードルホーフ階段』は、小説の表現対象が個人から社会全体へと移っていったドーデラーの小説群の中にあつて、ちょうどその転換期に位置する。(5)

『シュトルードルホーフ階段』の成立は、第二次世界大戦中の1941年12月から南フランスとソヴィエトで付けられていた日記帳に綴られた思い出に端を発する。(6) この思い出が膨れあがって、最終的に900頁もの大長編ができ上がった。当初、ドーデラーはこれを題材に小説を書き上げる意図はなかった。(7) この考えが変わったのは1946年になってからである。彼はそれを日記で「もともとモン・デ・マルサンとピアリッツで付けていた日記でしかなかったこのノートを、今後は小説として書きつづける」(8) とししている。そして、その二年後の七月に現在の形で小説の原稿が仕上がり出版社の手に渡され、(9) 1951年に出版のはこびとなった。その時、この小説は「『悪霊』へのかけ橋」(10) と銘うたれており、作者は次作『悪霊』の構想をたえず視野において『シュトルードルホーフ階段』の執筆に取り組んでいた。(11)

II

この小説では、先に述べたような形式で、ある人物あるいは場所が中心となって、いわゆる七つの世界が描かれている。それは、小説の中核をなすメルツァーの世界、また、彼の元婚約者マリー・Kの一見、平穩そのものに見えるブルジョアの日常世界、作者ドーデラーの自伝的要素を色濃く漂わせている遍歴の学生ルネ・シュタンゲラーを中心とした世界、彼の父の家、あるいはその夏の別荘が舞台となって、若手官僚や高級官僚、及びその娘たちが交流する世界、それとは別に、ルネの姉エテルカが結婚により加わった旧帝国外交官たちの優雅な世界、そして、新旧の時代が唯一調和を保って并存している場所として小説に登場するリーヒテンタール(Liechtental)を生活の場としている、パウラ・ピヒラーに代表されるまっとうな市民生活を送っている人々の、また、それとは逆にオイレンフェルトを中心としたボヘミアンたちの無拘束で非市民的な世界の七つである。これらはほとんど内的関連もなく、しかも複雑な小説構成の中で物語られていく。小説全体を一つのまとまりある物語としてつなぎ止めている糸は、この小説を最後まで

読み終え、その全体の構成をふりかえってはじめて判明する。つまり、ここに叙述された世界は、それぞれ何らかの要素によってそのどれかにつながっていて、さらに、緊密度の差こそあれ、これらすべてと結びついているのがメルツァーである。ドーデラーが小説における彼の役割を「私の小説をゆるやかにつなぎ合わせている結び紐」(12)と解説するように、この錯綜した小説はメルツァーを中心に一つの輪を形成する。

ここで示された多様な筋を、並列的に叙述する小説手法によってドーデラーがめざしているのは、社会の全体像を表出することである。実際、この方法は第一次世界大戦を挟んだウィーンの社会のある一面をパノラマ的に写し出すのに役立っている。しかし、こうしてそこに描き出されているのは、決して社会の総体ではなく、作者が属している社会層の諸相であり、いわゆる旧時代の影を引きずっているウィーンの市民階層のいろいろな日常生活にすぎない。ここにドーデラーの保守性が認められる。ドーデラーは第一次世界大戦後の政治的激動に背を向け、この混乱した社会の中に過去から変わらずにある不動のものを見つけ出し、不変の社会を作り上げる。それ故、彼の小説の人物たちはすべて、『悪霊』により鮮明にあらわれているように、変革を好まない社会層の人々であり、変革を阻止しようとする人々である。

事実、『シュトルードルホーフ階段』の膨大なページの中で、事件らしい事件は、メルツァーの人間化への直接の契機となる「シュトルードルホーフ階段」の上で演じられた1911年のスキャンダル事件の転末、また、彼の人間化達成を周知のものにすることになったマリー・Kの路面電車事故、あるいは、危うくメルツァーが巻き込まれそうになるオイレンフェルトと双子のパストレー姉妹が企てる煙草密輸の陰謀、そして、メルツァーの運命とは直接関係がない、エテルカに悲劇的結末を要求した三角関係による恋愛事件ぐらいである。あとは過去と現在の単調で、似かよった日常生活の情景がくり返し綴られ、小説全体を埋めていく。これにより、作者が意図する日常生活の不変性が表現される。

小説は1923年のマリー・Kの日常生活の描写に始まり、彼女と結婚するはずであった、1910年当時のメルツァーに対する彼女の思い出へと移り、小説の主要人物であるメルツァーがたどる運命の物語が始まる。小説の冒頭ですでに、はからずもメルツァーの人間化達成を証明することになった、物語をしめくくる事件、すなわち、マ

リー・Kに彼女の右足を失う結果をまねいた不幸な電車事故のことが挿入されており、予め小説の結末が暗示されている。この小説はその大枠をマリー・Kの運命で構成し、この枠の中で、彼女の思い出によって小説の舞台の上に連れ出されたメルツァーが、いろいろな迂回の経路をたどりながら人間化を遂げていく様が物語全体の軸となって小説は展開する。

小説の構成は4部からなり、背景となる時代はおおまかにいって1911年と1925年の二つに分かれる。第1部と第2部では、1911年が主なる時代背景となっているが、時として1925年へと移行する。特に第1部では、最初の1923年から1910年、1915年、第一次世界大戦直後の1918年から1921年、そしてこの小説の鍵となる1925年、さらに第二次世界大戦中のメルツァーの境遇が暗示される1945年へと、それも時代が前後しながらめまぐるしく変る。それに反して第3部と第4部では、物語は、一貫して1925年8月から10月にかけての視点から語られ、思い出を通して1911年当時のことがふりかえられる。

小説に舞台を提供しているこれら二つの時代は、しかしその背景にある政治・社会的問題がなにか一つ具体的に言及されず、ただ登場人物の日常生活の思い出によって埋められていく。また、ここで語られるこの二つの時代は、小説の中で年代をおって整然と進展していくのではなく、その展開は恣意的である。というも無意識のうちにあらわれて来る思い出は、その都度、その思い出を喚起する任意の媒体に基づくからで、このような思い出が小説展開の推進力となれば、おのずと小説の背景をなす時代は複雑に交差し、筋のはこびは錯綜する。

このジグザグな迂回の行程をたどって思い出されるいろいろな過去の生活が現状と対照され、その対照を通じて両者の類似性が確認され、同時に過去と現在の自己の存在の同一性も発見される。まさにこの自己確認の行程が、小説『シュトルードルホーフ階段』で表現される人間化の過程にほかならない。このような方法による自己同一の発見は、いかなる政治的、社会的変動があっても、日常生活は時代をこえて同じようになり返されるのだという彼の確信⁽¹³⁾から発することである。さらにまた、彼が人間の日常生活を「存在の高次の実在性の段階、同時に存在の測りえないが唯一の尺度」として捉えているからでもある。⁽¹⁴⁾ 小説『シュトルードルホーフ階段』の場合、それはメルツァーの人間化によって、彼が1925年から逆

に1911年の時の彼に通じる道を、日常生活の思い出を通して見つけ出し、彼の存在の歴史の一貫性を確認することである。同時に、この個人の歴史の統一が時代の歴史の連続性を証明することにもなる。何故ならば、ドーデラーは個人の運命と時代の運命は不可分に結びついているとの立場にたち、個人が自分の誤りに気づけば、おのずと時代の誤りも認識でき、そして自分の誤りを正せば、時代の誤りも修正できると考えているからである。⁽¹⁵⁾

ドーデラーは、小説の人物たちがうごめいている第一次世界大戦後のオーストリア第一次共和制の時代を、過去とのつながりが跡絶えた誤った時代、いわゆる「第2の現実」(die zweite Wirklichkeit)と理解し、「我々は全くけじめのない時代に生きている」(S.684)といい、「それは我々の時代の病根である」(S.684)と断定する。そして、その原因を彼は「人間が自分自身とあまりにも親密になりすぎた」(S.684)ために生じた現象であると説明する。ドーデラーは、この20年代を「腐敗した、自由で、極度に開化した第2の現実」⁽¹⁶⁾と考へ、小説の副題で「時代の断層」(die Tiefe der Jahre)と否定的に位置づける。彼のこの態度は彼の個人体験に基づいている。⁽¹⁷⁾ 第一次大戦後、1920年になってようやくシベリアの抑留生活からウィーンに生還したドーデラーは、すべての面で以前とは変った社会を前にして、自分が「崩壊の時代」にいると感じ、⁽¹⁸⁾ 戦争により時代は分断され、同時に自分の存在の歴史も跡切れたと考へた。彼はこの時代状況の中で、自己の存在の連続性を見つけるため、変らずに存在しつづけるものを探し出そうと試みる。それが永遠にくり返される日常生活であった。

この小説のテーマを表現するのにぴったりの空間を提供しているのが、物語の主なる舞台となっているウィーンの第9区、アルザーグルント (Alsergrund) である。そして、視覚的にこのテーマをあらわしているのが、そこに実在する「シュトルードルホーフ階段」なのである。この地区はリーヒテンタールを挟んで高台と低地に分かれていて、高台は昔からの市街地に通じ、それと隔絶された低地は新しく開けた地域に通じている。この地勢から、一方は過去を、もう一方は当時、すなわち1920年代をあらわしていると考えられる。さらに、この地域に示された構造が、当時のオーストリアの状況をも写し出しているとドーデラーは理解する。この全く異った性格を持った二つの地域をつないでいるのが、小説の表題の「シュトルードルホーフ階段」である。したがってこの階段

は、二つの違った世界、過去と現在を結ぶかけ橋として小説に登場している。(19) 実際、低地の居住者であるメルツァーは、それを通して上の世界へと導かれる。(20) この階段は、小説の巻頭に寄せられた詩ですでに暗示されているように、戦争の時代をものり越えて存在しつづけ、ドーデラーの求める不動なるものの証しとなる。そしてまた、この階段の持っている特殊な構造、すなわち二つの登り口から入り、それが一つになり、幾度も踊り場で区切られ、その都度反転してゆるやかな勾配をへて上の一つの出口に通じる構造に、彼は人間の人生の行程——回り道をしながらの人間化——を読み取っている。それと同時に、この階段に表現されている迂回の建築構造が、すでにこの小説の構成をも暗示している。

III

小説の表題になっている「シュトルードルホーフ階段」に暗示されている作品の意図は、物語の最も主要な人物であるメルツァーが歩む人間化に具体的に表現される。ドーデラーがいうこの「人間化」の概念は、端的に二つの内容を含んでいる。それは、人間が失われた過去を取り戻し、過去と現在が統一された人間存在になること、そして、そのような存在になることによって初めて、人間が自然の秩序に基づいて在る社会のメカニズムを認識し、現実世界に対して有意義に対応することができるという二つである。

メルツァーはハプスブルク帝国崩壊後、少佐の地位を最後に、それまでの職業軍人から一市民(官吏)になる。しかし、彼はこの新しい環境に適合することができず、彼の内部には「軍人」そして「市民」という異質な二人の人間ができてしまう。彼の内面に生じたこの分裂した状態をいやす(heilen)こと、すなわち、人間存在の通常の状態を回復し、そうすることによって善良な市民になることがメルツァーの人間化の意味するところである。

メルツァーの分裂の原因を、ドーデラーは戦争にあるという。何故ならば、「合法的に組織された恐怖と驚愕の世界の中であっては、実りは個人の核にもたらされるのではなく、集団に還元される」(S.85)からである。これまでこの環境の中でしか生活したことがなかったメルツァーは、戦後の人生の再スタートにおいても軍隊時代と同じく、他動的にオーストリア国営煙草専売に顧問官としてやって来たにすぎなかった。形の上では社会復帰を果

したメルツァーであるが、彼は軍人生活の中で培われた体質を引きずって生活しており、それを示すようにながく「少佐」の称号で呼ばれつづける。一般社会の中で自らの判断と決断で行動できない無能者となってしまったメルツァーは、それ故、必然的にそれまで彼の模範であったラスカ少佐(後に大佐)に対する思い出の世界に埋没していく。この少佐なき今、彼の思い出の支えとなっているのが、ボスニアの森でラスカ少佐と一緒にいった熊狩りの時の獲得物である熊の毛皮で作った敷物で、「それを彼は生涯はなさなかった。」(S.84)メルツァーが陥っているこの世界が、いわゆる現実から遮断された生活であり、すなわち、ドーデラーが用いる概念でいうと、統覚の拒絶(Apperzeptions-Verweigerung)によって作り上げられた「第2の現実」である。

しかし、この状況に身を没めていたにもかかわらず、一方で、たえず社会と「連帯した健全な存在」(S.97)でありたいと望んでいたメルツァーは、誤って彼と同じように現実と遮断されて生きている元騎兵大尉オイレンフェルトを中心にした旧帝国将校たちと関係を持つことになってしまう。特に、もともと強引で極端に活動的な性格のオイレンフェルトに、当時彼の生活の支えであったラスカ少佐との類似性を誤認したことにより、彼はこの元大尉に傾倒し、ますます深みにはまり込む。だが、作者がいうように、彼の存在を構成しているもう一つの「元素」(Grundstoff seiner Biographie)が徐々に支配的になり、戦後7年を経過して、メルツァーはようやく間違った方向に進んでいることに気づき慄然とする。「戦争での中隊指揮官としての彼の自立性や責任も、メルツァーは今、まるで彼の生活全般に共通している自立性の欠如の枠組に組み込まれていたことを認識しはじめた。その枠組の中では、彼は一度たりともどこかへ行ったのではなく、いつもただ、どこかへ来させられたにすぎなかった。トレスカヴィカの森(熊狩りをした森)にしてもそうであった。彼は連れて行かれたのだ。ちょうど今日の午後車で連れて行かれたように。これらすべてのことが少佐を驚愕させた。したがって彼は、本当の意味で生活している人なら誰もが避けて通れないあの瞬間を耐えねばならなかった。つまり本当の意味で生活したことがなかったという深い不安に。」(S.96)メルツァーが耐えなければならぬこの不安は、これまで自分の意志で行動したと信じていたあの熊狩りの日々もそうではなかったことに気づいたことによって生じたものである。彼を深刻な不

安に落し入れた彼の他動的な行動様式は、「彼の生活全般に共通している自立性の欠如」に原因があり、本来、彼の性格に基づいている。それを認識したメルツァーは、「これによって、少くとも人生の重要な、そして新しい一歩が踏み出されたということができようであろう」(S.96)と作者が解説するように、人間化への道を歩みはじめる。

メルツァーの人間化は、まず自己の性格を克服することからはじまる。何故ならば、ドーデラーは人間の性格を、生れながら生物学的に個人にそなわった決して変えることのできないものであり、したがって性格の発展はありえないとみなしているからである。(21)ドーデラーは彼の人間観の一つの中心をなす Apperzeption (統覚)の考え方に立って、「人間は一般的にいて、すべての方面にわたる能力を持たないが、あらゆる方向から感じ取ることは可能である」(22)と人間を理解する。それ故、彼は性格を人間の視野と適応能力を狭め、結果として、人間に自然の秩序の否定を意味する統覚の拒絶をもたらすものと捉え、「性格はすべて悪いものである。良いといわれる性格でさえまさしくそうである」(23)と断定する。

メルツァーをながく支配していた「第2の現実」は、彼が戦前に休暇で軍人から市民にもどった、ごく短期間に送った日常生活の思い出によって克服される。彼が第一次世界大戦前の生活に自分を見つけ出そうとする時、自然に浮んでくる思い出は、1911年のシュトルードルホーフ階段にまつわる一つの事件であった。それは場違いな所でキスをしたことに端を発したセムスキーとイングリット・シュメラのスキャンダルで、その悲しい最終幕がメルツァーはじめ数人の見守る中、この階段の上で演じられた。第一次世界大戦後、そのシュトルードルホーフ階段の間近に住んでいたメルツァーは、この階段に人生のなにかを感じ、奇妙に心引かれていた。そのメルツァーが思い出すことは、14年前のあの事件のことだけであった。この思い出が繰り返し彼の心の中に立ちのぼって来、彼の内部でやがて動かし難い現実となる。そして、この階段が彼の存在にとって支柱となっていく。「ともかく今や、彼は内面的にはラスカ少佐ではなく、ある程度シュトルードルホーフ階段に、心の支えを求めようとする。」(S.319)

しかしこのスキャンダルの思い出以外、メルツァーの思い出は全く空白のままであった。彼が一気に自分の過去を取り戻すのは、1925年8月22日の午後である。この日はそれまでのいわゆる思考の眠り (Denkschlaf) 状態

とは違って、はっきりした意識の中で断片的にはあるが、14年前のことが鮮明に思い出される。この思い出の断片を一気につなぎ、さらに思い出の輪を広げたのが、ナフタリンの臭いと通りの手回しオルガンから聞えて来た行進曲であった。つまりメルツァーは、熊の毛皮の敷物から漂ってくるナフタリンの臭いにより、これと同じ臭いが漂っていたアスタの部屋を思い出す。彼がそのアスタを最後に見たのは14年前のシュトルードルホーフ階段の上で、それはあのスキャンダルがあった日であったこと、そして、その日はちょうど今日と同じ8月22日であったことが次々と思い出され、思い出はつながっていく。そしてまた、手回しオルガンから聞えて来た行進曲は、彼が14年前の8月18日、皇帝の81才の誕生日の日に聞いた行進曲と同じであった。当時、休暇ですごしていたシュタンゲラーの別荘のある田舎での出来事で、アスタたちと一緒に見物した皇帝の誕生日を祝う炬火行進のための行進曲であったことがはっきりし、思い出の輪が広がっていく。このようにして当時のメルツァーの姿が鮮明になる。この二つのことを媒体にして、「今や、驚異的なかたちで、メルツァーの記憶の谷間がうまった。」(S.298)

彼の断片的な思い出をつなぎあわせたナフタリンの臭いと行進曲の二つを、メルツァーが「まさしく途方もないものと感じた」(S.299)ように、ドーデラーにおいて臭いと音楽は、人間の精神作用や記憶との関連で特別な意味あいを持つ。彼は音楽には人間のよくだ平坦な精神を活性化する力があると考え。(24) また、臭いについて彼は、臭いの記憶を意識的に思い出すことはきわめてむずかしいが、それは最も根源的な形をとって記憶の中に残っており、(25)したがって、「臭いの感覚は五官のどんなものよりも緊密に記憶と結びついている」(26)という。それ故、このような媒体によって喚起された思い出は客観的事実となる。ドーデラーの作品では、先に述べたように、日常生活は永続性と人間存在の高次の実在性を証明するものである。そして自然にたちのぼる思い出も、日常生活と同じく超時間性と存在の類似性を示すものとドーデラーは考える。(27) 思い出に対するドーデラーのこの見解を、ブルースト、ヴァイニング、スヴォボダ、ひいてはショーペンハウアー等の影響によるものであるとW・デュージングは指摘した上で、ドーデラーの考える思い出が持っている、自己の同一性確認の機能を次のように説明する。「自然に発生する思い出は、単に生活の過

ぎ去った瞬間を再現するのではなく、当時の体験をはるかにしのぐ力強さをもって、とっくに忘れ去ってしまったことを喚び起こすのである。思い出は〈ある類似性の奇跡〉によって、ただ過去と現在の状況との間に一つの関係を作り上げるだけでなく、過去と現在の自己の状況の間にも一つの関係を打ち立てる。』⁽²⁸⁾

過去の生活の思い出と彼がいま生きている現実の状況とがつながることにより、自分の存在の連続性を確認したメルツァーは、「自分が変わったと」感じた。(S.325) このことは、彼の内部にできていた「当時のメルツァー、少尉。今日のメルツァー。今この二つが癒合した」(S.753) ことを意味し、彼は人間化の最終段階に突入する。そして、分裂していた自己の統一を成し得たメルツァーは、彼の存在が「常に何かある方法で相互に関連し合って存在していた」ことをようやく認識する。(S.895) メルツァーのこの認識は、彼の自己確認の過程で明らかにされたように、すべての存在が普遍的であり、あらゆるものの中にその類似的なものが認められるというカトリック神学の根幹をなすトマス・アクイナスの存在の理論 (analogia entis) に基づいている。この世界観に立脚してドーデラーは現実世界に対する人間の取るべき態度と行動を「統覚」の概念を用いて説明する。ドーデラーが使うこの概念は、あらゆる主観的な思念を取り払い、世界をそのまま受けついでいくことを意味する。それを彼は具体的に次のように説明する。「行動を起さないということは、周囲を変えないことである。すなわち、人は殺人捜査班が到着する前の事件現場にいる警察のようにふるまうべきである。そこでは、多くの写真が写されてしまうまでは、椅子が動かされたり、小さな折り目といえども位置がずらされたり、ちりやほこりも吹きとばされたりすることは許されない。そのような態度が有効な統覚の前提である。』⁽²⁹⁾ ドーデラーは、このような態度に立ってのはじめて人間が社会の中で活動的かつ善良な市民となることができると考える。

事実、自己の存在の統一を発見し、社会のメカニズムの基をなしている自然の秩序を認識したメルツァーは、閉め切っていた部屋の窓を全開し、それによって、今まで外界世界を遮断していた彼の心を、外の世界に対してはじめて開くことができたことを示す。こうして外界と接触が持てるようになったメルツァーは、彼とは違って自然の秩序の中で人生を送って来たパウラ・ピヒラーが催したガーデンパーティーの場で明かにされたように、

会話能力を取り戻し、持続的な人間関係を築けるように変貌を遂げる。そして、「人間化」の到達点が自然に行動できる人間として生れ変わることであれば、それはマリー・Kの電車事故の時の迅速かつ適切な応急処置に見られる、彼の行動に象徴されていると考えられる。この一連の段階を経て、「全き人間」として生れ変わったメルツァーの総仕上げとして、テア・ロキツァーとの結婚がある。ドーデラーは結婚を「秩序づけることができないものを秩序づける試み」⁽³⁰⁾と理解していることから、結婚は自然の原理にかなった持続的な人間関係の形式と理解している。メルツァーを通してここに示された人間化は、人間がいろいろな紆余曲折を経ながら、カトリックの世界観に基づいた自然の生成原理を認識し、自己の全人格の統一をはかり、「全き人間」に生れ変わることでありと理解される。

IV

小説『シュトルードルホーフ階段』には、以上のことから、この小説がいわゆる教養小説 (Bildungsroman) かという問題がたえずつきまとう。何故ならば、小説の中心テーマは「人間化」であり、それがメルツァーの「倫理的発展過程」を通して語られているからである。そして、そこに描かれた人間化の到達点だけを見れば、この小説はドイツにおける伝統的教養小説の枠組の中で見ることもできるかもしれない。しかし、ドーデラーのこの小説には教養小説といえない要素がいくつかある。そればかりかこの小説は、人間の発展概念の捉え方などの面でむしろ反教養小説の一面さえのぞかせている。

ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』と不可分の関係にある「教養小説」の呼び名は、小説の主人公が人生のそれぞれの局面で経験するいろいろな体験を通して、調和的で全体的な人間に形成されていく過程を描いた小説に冠されるものであると考えられる。つまり、『修業時代』の主人公ヴィルヘルムがヴェルナーに宛てた手紙の中で「ぼく自身をあるがままにつくりあげていく (ausbilden) こと、それがおぼろげながらも小さいときからぼくの願いであり、もくろみだった」⁽³¹⁾ というように伝統的教養小説は、はじめから自己形成意欲を持った個人が、苦難に直面しながらもたえず積極的に外界と接触を保ち、個人と世界の相互作用を通して、生れながらにそなわっている個人の資質を具現していく様子を描い

たものと理解することができる。それはフマニスムスの理念に基づいて、人間は自己に内在する創造能力によって、個人と世界の両面にわたって自己を調和的に形成していくのが可能であると考え、⁽³²⁾ 人間が外界と均衡を保ちながら性格や意志を有機的に発展させ、そうすることによって、世界の中で存在の場を確保し、自らを調和ある全人格に作り上げていくのが伝統的教養小説に見られる人間像である。したがってこの場合、人間の発展段階を跡づけるようにその舞台となる世界も必然的に高次なものに変遷していく。⁽³³⁾ そして、その過程は主人公を中心にして順序よく統一的に物語られていく。

小説『シュトルードルホーフ階段』をこれと対比させてみるならば、この小説が伝統的教養小説と異なるのは小説の構成の点にも認められる。ドーデラーはかたくななまでにメルツァーを小説の主人公と呼ぶことを拒否する。⁽³⁴⁾ たしかに、小説はメルツァーの人間化の行程が軸となって展開している。しかし、すべてが密接に彼と関わりつつ、いわば彼を中心にして求心的に物語られているわけではない。

また、伝統的教養小説に見られる「発展」は、たえず将来へ向かって前進的で形式的であるのに対して、ドーデラーがいう「人間化」には、この個人の積極的な発展は認められない。メルツァーの例でも明らかなように、それとは反対に、外的世界を遮断して自己の内面に引きこもることから人間化の第一歩がはじまる。ドーデラーの小説の場合、人物は自己の前史とつながりを欠いた人間として登場する。それ故、このような人間が生き、動かししている現実の社会や時代も必然的に歴史の連続性が跡切れた誤った現実として描かれる。そして、そこにできた断絶を登場人物が思い出を唯一の依りどころにして、これまでの自己の存在の前史を掘りおこし、存在の同一性を確認することで埋めようとする。この過去に存在の同一性を見つけ出すことは、絶対的存在者が創造し統治している自然の秩序が不変なることの認識にほかならず、人間化を歩まなければならない人間は、この認識に立ってはじめて、外界と積極的に接触を持てるようになり、また、そこで活動できるようになる。したがって、従来の発展概念とは全く異なり、人間化は「〈発展〉の一つの特殊な形態である」⁽³⁵⁾ ということができる。

上述したように、ドーデラーの小説に表現される「人間化」と伝統的教養小説の「人間形成」とに見られる、この二つの発展の方向は、一方が過去に向うのに対して、

他方が将来に向い、全く正反対である。この相違を生み出している一つが、人間の性格に対する異った見解である。ドーデラーは人間の性格を、伝統的教養小説に認められる捉え方とは逆に、発展の可能性が全くないもの、かつ人間を誤った方向に進ませるものと理解する。それ故、性格は人間化にとって障害となるものであり、克服されなければならない。

しかし、何にもましてドーデラーのいう人間化が伝統的教養小説における人間の発展形成と異なる点は、W・デュージングの指摘にもあるように、⁽³⁶⁾ 伝統的教養小説の一つの核をなしている「発展概念」をドーデラーが根本的に否定しているところにある。

「〈発展〉は決して正当と認められ得るものではない。何故ならば、発展は混乱を前提としているからであり、したがってそれはせいぜいある災厄の除去であり、通常の状態を取り戻す、あるいはそれを遅ればせながら確立することだからである。それ故、それが独立した価値のあるものと見なされることは全くばかげたことである。のみならず、発展自体ばかげたことであるか、そのようなものを隠蔽する手段である。我々は取り除いてしまわれなければならないものに価値をおくことはできない。したがって、せいぜいこの排除する力が肯定的なだけである。」⁽³⁷⁾

「発展概念」に対するドーデラーのこの否定的見解は、まさに、個人と外界の相互作用により、人間が有機的に自己を形成し発展を遂げていくことをうたった、伝統的教養小説そのものの否定であると受け取れる。

小説『シュトルードルホーフ階段』に描かれている人間の到達点だけを見るかぎり、ドーデラーのこの小説も伝統的教養小説も似たような結果を示している。しかし、人物がその到達点に至る過程は全く異なる。その原因は、先に示したゲーテとドーデラー、この二人の世界観の違いに求めることができると思われる。したがって、伝統的教養小説のあの発展概念の否定に立脚して、いわゆる人間の倫理的発展である人間化を描いたドーデラーの小説『シュトルードルホーフ階段』は、アンチ「教養小説」の一つとも見ることができるであろう。

註

小説『シュトルードルホーフ階段』からの引用は、直接本文の中に引用箇所を頁数を記入した。なお、テキストとして Heimito von Doderer: Die Strudlhofstiege oder Melzer und die Tiefe der Jahre. München 1973 を使用した。

- 1) Vgl. Heimito von Doderer: Tangenten. Tagebuch eines Schriftstellers. 1940-1950. München 1964. S. 592.
- 2) Menschwerdung はもともと神学上の概念で、神が人となったことを指し、「受肉」という訳語があげられている。ここでは、過去と現在が統一した人間存在になることによって、人間が存在の根底にある自然の秩序を認識し全き人間になることを意味する用語として使われている。小川超氏にならって「人間化」という訳語をあげた。
- 3) Herbert Eisenreich: Heimito von Doderer. In: Deutsche Dichter der Gegenwart. Ihr Leben und Werk. Hrsg. v. B. v. Wiese u. a. Berlin 1973. S.48.
- 4) Tangenten. S. 592f.
- 5) Vgl. Dietrich Weber: Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk. München 1963. S. 62 u. 75
- 6) Vgl. Tangenten. S. 101 ff.
- 7) Vgl. Tangenten. S. 102.
- 8) Tangenten. S. 403.
- 9) Vgl. Tangenten. S. 599f.
- 10) Dietrich Weber: Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk. S. 77.
- 11) Vgl. Tangenten. S. 403, 409 u. 481.
- 12) Tangenten. S. 542.
- 13) Vgl. Dietrich Weber: Heimito von Doderer. In: Deutsche Literatur der Gegenwart in Einzeldarstellungen. Bd. 1. Hrsg. v. D. Weber. 3. überarbeitete Aufl. Stuttgart 1976. S. 81.
- 14) Heimito von Doderer: Repertorium. Ein Begreifbuch von höheren und niederen Lebens-Sachen. Hrsg. v. D. Weber. München 1969. S. 146.
- 15) Vgl. Wendelin Schmidt-Dengler: Österreichische Literatur nach 1945 (Vorlesungs-Skriptum. SS 1978). S. 8.
- 16) Hans J. Schröder: Kritische Überlegungen zum Wirklichkeitsverständnis Doderers. In: Heimito von Doderer 1896-1966. Symposium anlässlich des 80. Geburtstages·Wien 1976. Salzburg 1978. S. 70.
- 17) Tangenten. S. 363.
- 18) Wendelin Schmidt-Dengler: Scylla und Charybdis. Der junge Doderer zwischen Journalismus und Fachwissenschaft. In: Heimito von Doderer 1896-1966, a. a. O., S. 10.
- 19) Vgl. Die Strudlhofstiege. S. 285.
- 20) Vgl. Die Strudlhofstiege. S. 355.
- 21) Vgl. Doderers Brief an Weber. In: D. Weber: Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk. S. 33. なおドーデラーのこの見解はショーペンハウアーの「性格」に対する捉え方に基づいている。Vgl. D. Weber, a.a. O., S.267f.
- 22) Tangenten. S.18.
- 23) Doderer im Gespräch. In: D. Weber: Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk. S. 33.
- 24) Vgl. Repertorium. S. 160.
- 25) Vgl. Repertorium. S. 98.
- 26) Tangenten. S. 464.
- 27) Vgl. Tangenten. S. 105.
- 28) Wolfgang Düsing: Erinnerung und Identität. Untersuchungen zu einem Erzählproblem bei Musil, Döblin und Doderer. München 1982. S. 176.
- 29) Tangenten. S. 321.
- 30) Repertorium. S. 115.
- 31) 第5巻3章。(登張正実氏の論文「教養小説」の中の訳による)
- 32) 登張正実 「教養小説」『西洋文学の諸相』(東京大学出版会 1974) 235頁 及び木村直司 『続ゲーテ研究・ドイツ古典主義の一系譜』(南窓社 1983) 356頁を参照。
- 33) 登張正実 「私の〈教養小説〉観」『教養小説の展望と諸相』(しんせい会編集 三修社 1980) 10頁を参照。
- 34) Vgl. Tangenten. S. 524f.
- 35) Dietrich Weber: Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk. S. 46.
- 36) Vgl. Wolfgang Düsing: Erinnerung und Identität.

S. 223.

37) Tangenten. S. 812.

Abstract

Heimito von Doderers "Die Strudlhofstiege" ——"Entwicklung" in der Menschwerdung——

Masato MURAYAMA

Wie in seinen anderen Romanen handelt es sich auch im Roman "Die Strudlhofstiege" Doderers um die "Menschwerdung". Sie enthält die folgenden zwei Punkte: 1. Der Mensch, in dem sich ein Bruch zwischen der eigenen Vergangenheit und der eigenen Gegenwart ergibt, muß seine eigene Vergangenheit bei sich zurückholen und die Vereinheitlichung seiner Person erreichen. 2. Erst wenn diese Vereinheitlichung verwirklicht wird, kann der Mensch den sozialen Mechanismus, dem die unveränderliche natürliche Ordnung zugrunde liegt, erkennen und in der Welt richtig handeln. Der Prozeß der "Menschwerdung" wird in der "Strudlhofstiege" durch die sittliche "Entwicklung" Melzers, den man beinahe den Hauptperson des Romans nennen kann, konkret ausgedrückt. In der vorliegenden Arbeit wird der Mechanismus seiner "Menschwerdung" von der dahinter versteckten thomistischen Weltanschauung Doderers her untersucht. Bei der "Strudlhofstiege" kommt es immer in die Frage, ob sie zum "Bildungsroman" gehört. Denn sie handelt von einem gleichen Problem, das im traditionellen Bildungsroman wie in den "Wilhelm Meisters Lehrjahren" Goethes erkennbar ist. Infolgedessen wird hier auch die in diesem Goethe-Roman formulierte menschliche Entwicklung berücksichtigt. Dann bekommt man ein ganz anderes Resultat; die Entwicklung in ihm tendiert zur Zukunft, dagegen ist sie im Doderer-Roman auf die Vergangenheit gerichtet. Aber dessen größte Unterschied zum Roman Goethes liegt in der Haltung Doderers, daß er den Begriff der traditionellen Entwicklung prinzipiell ablehnt. Deshalb könnte man "Die Strudlhofstiege" Doderers als "Anti-Bildungsroman" bezeichnen.

Department of Foreign Languages (German)